

# 不安の社会学(1)

清水 強 志

## 要約

「不安の社会学」という本研究の目的は、現代社会において増加している不安の特徴を社会的に明らかにすることである。また、これまでの不安についての社会学理論を再考し、さらにそれらの研究・整理を通して、現代におけるデュルケーム社会学の意義を検討することにある。

その序章にあたる本稿では、まず、フロイトを手がかりに、社会学的研究の対象としての「不安」について明らかにした。その上で、サムナーの「内集団／外集団」論を、フロイトの成長の初期段階における「外」への認識をふまえつつ、ギルヴィッチの「われわれ意識」およびデュルケームの「社会統合論」によって拡充し、心理現象としての「不安」を社会的に研究するための中範囲の理論を確立した。

キーワード：

不安、フロイト、サムナー、ギルヴィッチ、内集団・外集団、われわれ意識、デュルケーム

コミュニティは「暖かい」場所であり、居心地がよく、快適な場所である。  
(中略) ここは安全で、暗い街角で不気味に迫ってくるさまざまな危険とは無縁である(中略)。「コミュニティ」は、今日では失われた楽園の異名であるが、わたしたちはそこに戻りたいと心から望み、そこにいたる道を熱っぽく探し求めているのである<sup>1)</sup>。  
ジグムント・バウマン

## 1. はじめに

「不安」は、個人における心理的現象(感情)である。それゆえに、社会的にアプローチすることに違和感を覚える人は少なくないかもしれない。しかし、たとえば、実証的 sociology の立場のエミール・デュルケーム(Émile Durkheim, 1858-1917)は、個人の心理を排除したとしばしば誤解されているが、彼の社会学理論において

「個人の心理」は重要な位置を占めている(清水 2007)。実際、『自殺論』では、諸個人における欲求充足の可否による満足・不満が重要な位置を占めている。他方、現代社会を「リキッド・モダニティ」(液状化した近代)と表現したジグムント・バウマン(Zygmunt Bauman, 1925-2017)の主要テーマの1つは、社会学的視点から「不安の増加している現代社会」の原因・特徴を明らかにすることであったと言っても過言ではないだろう。

本稿では、まず、1926年のジグムント・フロイト(Sigmund Freud, 1856-1939)の論文「制止、症状、不安」を手がかりに、社会学的研究の対象としての「不安」とはどのようなものなのか明らかにする。次いで、個人に不安を生じさせる社会的要因(社会的事実等)を構造的に把握するための概念として、ウィリアム・グラハム・サムナー(William Graham Sumner, 1840-1910)の「内集団／外集団」論の特徴を明らかにする。そして、彼の理論をジョルジュ・ギユルヴィッチ(Georges Gurvitch 1894-1965)の「われわれ意識」によって補完し、社会学的に不安を研究するための中範囲の理論としての「内集団／外集団」論を確立する。これが本稿の目的である。

なお、「不安の社会学」という本研究の目的は、現代社会において増加している不安の特徴を社会学的に明らかにし、またこれまでの不安についての社会学理論を再考し、さらにそれらの研究・整理を通して、現代におけるデュルケム社会学の意義を検討することにある。本稿は、その研究の序章である。

## 2. 「不安」とは何か

最初に不安を体系づけたフロイトは、「制止、症状、不安」(1926年)において、期待と明瞭な関係を持つ不安は、(期待とは裏腹に)危険を知らせる警告・注意喚起の信号、すなわち「危険状況に対する反応」(Freud [1926a] 1972: 159 訳56、他)と述べている。とはいえ、フロイトによれば、危険はすべての人間に存在するもの(普遍的なもの)なので、心の防衛過程という観点から述べれば、危険を予期して不安を感じるという内的反応は、諸個人において非常に大切な機能といえる。つまり、当然のことながら、すべての不安が病気というわけではなく<sup>2)</sup>、それゆえに、彼において重要な関心事は、不安の情動を正常な心の働きのもとに支配できる個人と支配に挫折する個人の違いということであった。彼は、症状的な不安の要件として、①個人内における不安の対象が別のものに「代替」されていること、および②危険に対する過度の反応を挙げている。

フロイトによれば、危険には、外的な(既知の)現実的危機と内的な(未知の)欲動危険があり、前者に対する不安を「現実的不安」(正常な不安)、後者に対する不安を「神経症的不安」と区別している(Freud [1926a] 1972: 198 訳93)。なお、フ

ロイトによれば、馬にかまれるかもしれないという症状は、実際に実在する「馬」が対象であることから、現実的危険と位置づけられる。そのため、両者の区別においては、現実には起こりうる危険かどうかは問題ではない。また、「未知の危険」というのは、自己あるいは他者による認識の可否とは関係なく、個人の心において（自我が対応できない）欲動による要求・攻撃から生じる欲動危険を指している。

その上で、彼は2つの不安が混在している事例を通して以下のように述べる。私たちは、危険状況に直面した際に、実際の過去の経験にもとづいて自分の強さを見積もり、危険状況の大きさと比較するが、（正しい判断だったかどうかは問題ではなく）無力な状況が予期された時、より正確に述べれば、現実的危機の場合には物質的無力さ、欲動危機の場合には心的無力さを認めた時に、外的危険あるいは内的危険を避けるための不安の信号が生じる、と。要するに、自分が危機を乗り越えられるかを予測・検討し、期待に反してうまく乗り越えられないと判断された場合に不安が生じるのである。なお、不安信号の起こり方としては、(a) 認識され、想起され、予期された危機状況における物質的・心的無力さの予期と、(b) 過去における無力さの経験の反復（思い出させること）という2つのパターンがある（Freud [1926a] 1972: 198-199 訳 94-95)<sup>3)</sup>。

そして、個人の外における事象との関係で不安を感じることは「了解可能な情動的反応」と考えるフロイトは、不安の対象を別のものに「代替」（遷移）していることが「『症状』という名で呼ばれることを求めるものを作り上げている」と述べる（Freud [1926a] 1972: 131 訳 28-29、下線清水）。すなわち、「代替＝症状」ではないが、代替が症状の要件となっているというのである。そして、自我は現実危機に対するようには欲動危機に対応できないので（Freud [1926a] 1972: 187 訳 84）、「自我は不安反応の助けを借りて、欲動危険からも現実的危険からも身を護るが、心の装置の不完全性のためにこの防衛行動の方向が神経症への道を開いてしまう」（Freud [1926a] 1972: 200 訳 96）と、フロイトは考える。

他方、フロイトは、強迫神経症における潔癖等の性格は通常の人よりも極端に形成されたものであり、また好ましくない情動をもたらす出来事を連想連関から孤立させる技法は健常人における精神集中と同じものと考えていた。このことから加藤敏は、「正常人は大なり小なり強迫神経症に近縁なありかたを」示しており、また「正常人は多少とも神経症を思い、このことが正常性の条件ということもできる」（加藤敏 2010: 369）と述べている。それゆえに、第2の区別、つまり、健常者と神経症者の区別は、神経症者が危険に対する反応を過度に高ぶらせている点にある（Freud [1926a] 1972: 180 訳 76）とのフロイトの指摘は重要な意味を有する。

このことに関連して、「不安」という言葉が持つ意味の「広さ」と「深さ」について確認する必要がある。一般に、日本語の「不安」に該当する言葉は、英語では 'anxiety'、ドイツ語では 'Angst'、フランス語では 'anxiété' あるいは 'angoisse'

が該当するが、たとえば、*Le Petit Robert de la Langue Française Dictionnaire 2022* (以下、‘*Le Petit Robert*’と略記)によれば、‘anxiété」を「しばしば身体的な現象を伴う、不幸あるいは危険な出来事の差し迫った感覚によって引き起こされる心的動揺の状態」(Robert Paul 2021: 111、筆者訳)と説明している<sup>4)</sup>。さらに述べれば、フランス語では、「不安」に該当する言葉は多数あり、強度に応じて表現が変わり、弱いほうから順に並べると、‘appréhension’、‘inquiétude’、‘anxiété’、‘angoisse’となっている(Robert Paul 2021: 1308)<sup>5)</sup>。精神医学における「不安」の意味を持つ言葉は、もっとも強い不安を示す(最後の)‘angoisse’である。また、当然のことながら、フランス語の文章を訳す際には、これらの単語が用いられていなくても、心配や懸念等のニュアンスから「不安」と訳されることもある。なお、『広辞苑[第7版]』によれば、「不安」とは、「①安心のできないこと。気がかりなさま。心配。不安心。(以下略)」(新村: 2021: 2518)とあり、日本語としては、類義語として「心配・懸念」等があることが確認される。つまり、「心的動揺・苦しみ」の状態を示す「不安」は、広さと深さを伴う「心理的現象」ということである<sup>6)</sup>。

そもそも、「不安」の対義語は「安心」であるので、未確定な未来において「安心」が得られないことを予期した時に生じる心理的現象が不安であるといえる。それゆえに、「期待」というのは、必ずしも明確なイメージを有しているとは限らず、むしろ漠然とした「安心・安定」の状況も含んでいる。そして、無力感だけでなく、危機感や不満足感という感情とも関わる。逆にとらえれば、臨床心理における「不安」は強い不安を指すので、まさに「危機」に関わると言える。そのため、本社会学的研究では、必ずしも「危機」という言葉では適切に言い表せない未来予測を含むことは否定できないが、あえてフロイトの文章に合わせれば、「未来において安心・安定が得られそうにない状況」を「危機」と表現することは可能と考える。

なお、「期待」との関連をより重視し、かつ、フロイトのリビドーによる考えを弱めて、「制止、症状、不安」論文における危険状態を総括すると、以下のように言い直すことができる。すなわち、(a) 自らの期待通りに欲求が満たされない状況あるいはそれが予期される状況、(b) 自分の大切なもの(人・モノ)との分離あるいは喪失の危機、(c) 愛する(憧れの)人物あるいは安心を与えてくれる人物の不在、(d) 愛の喪失である。そして、自らの能力および過去の経験を参照しつつ検討するので、不安は無力感あるいは無力(hilflosigkeit)にも関わる。さらにフロイトは、成長に伴って危険は不特定なものとなり、何が脅威なのかを容易には言い表せなくなった危険に対する、良心の不安、社会的不安、死の不安(生の不安)が生じることも指摘している(Freud [1926a] 1972: 170 訳67)。

### 3. 本研究の対象：不安と恐怖

ところで、「不安」について考える上で、もう一つの重要な点として、「恐怖」との違いがある。フロイトは、「不安には、不確定性と没対象性という特徴が付き随う。正確な言葉の用法からすれば、不安が対象をみつけてしまえばその名は変わってしまい、不安の代わりに恐れという」(Freud [1926a] 1972: 197-198 訳93)と述べている。すなわち、明確な対象の有無によって不安と恐怖に分けられ、不安は具体的な対象を持たない漠然とした危険に対して、自分の期待とは裏腹に悪いことが起こるのではないか(期待通りにならないのではないか)という心的な反応ということになる。とはいえ、フロイトにおいては、「現実的危機に対する不安」、「切迫した危機に対する不安」、さらに「恐怖から生じる不安」等の表現があり、一見、明確な対象を有している場合にも、不安が生じると考えていたように思われる。この点について、岸見一郎は、地震で大地が揺れている時に感じるものが「恐怖」、「また大きな地震が来るのではないか」と思う時に感じるものが「不安」と説明している(岸見 2021: 24)。すなわち、両者の区別においては、現実には恐怖を感じさせる対象物をまさに目の当たりにしている場合には恐怖、対象を予期しているだけの場合は不安ということになる。

他方、奥井智之は、恐怖と不安をあえて区別せずに、「恐怖と不安とは複雑にからみ合っている。(中略)十分に認識したり、制御したりできないものが恐怖と不安の源泉である」(奥井 2014: 15-16)と述べている。実際、ホラー映画を観ている時、あるいは、夜道を一人で歩いている時に(実際にいるか否かは別にして)自分の背後に危険人物や幽霊がいるのではないかと考える時に感じるのは、恐怖なのか不安なのか、区別することが難しいように思われる。それゆえに、あえて区別するのであれば、(a) 不安、(b) 恐怖に加え、(c) 不安と恐怖の混交した感情という第3の領域を付け加えるほうが妥当であると筆者は考えている。そこで、本研究では、必要以上には両者を区別せず、危険を十分に認識できなかったり、コントロールして自分の期待通りにならないと判断したりした時(自己の無力を感じた時)に、不安あるいは恐怖を感じるという立場を重視する。

なお、この視点はバウマンの社会学理論を理解するうえでも重要な意味をもつ。実際、バウマンも、フロイト同様、「『不安』(fear)とは、われわれが持つ不確実性に、われわれが与えた名前である」(Bauman 2006: 2 訳8)と述べている。しかしながら、この翻訳には注意が必要である。なぜなら、英語の‘fear’は、一般に「恐れ」と訳されることが多いからである。そもそも、バウマンの著書 *Liquid fear* のタイトルは『液状不安』と訳されている<sup>7)</sup>。実際、本書においてバウマンは、‘anxiety’の単語も用いる一方で、本のタイトルには‘fear’を用いている。その



ことについて、訳者の澤井敦は「訳者あとがき」において以下のように述べている。「本書の書名 *Liquid fear* であるが、この fear という語は、『恐怖』と訳されることも多いと思う。(中略) 本書の場合、fear という語が使われる場合、むしろ日本語の『不安』に近いニュアンスで用いられていることがほとんどである」(澤井 2012 : 269頁) と<sup>8)</sup>。

すなわち、バウマンにおいては、恐怖と不安のどちらの状況にも適用できる 'fear' を理論の中核の1つにすえていることは重要なことであったと考える。誤解を恐れず述べれば、バウマンの社会学理論において大切なことは、不確実性にもとづく「不安」だけでなく、具体的な対象に遭遇している「恐怖」をも含む理論であったということである。

ところで、本社会学的研究では、当然のことながら、個人の内面における症状的不安を対象とするフロイトとは異なり、個人の外的事象との関係で不安や無力感を生じさせるものを探求する<sup>9)</sup>。漠然とした危険状況に対して自らの期待通りにならないのではないかとその予期から不安が生じるというフロイトの説明は確かに説得力のあるものであり、それはデュルケームやエーリッヒ・フロムが孤立した個人における不安と無力感について述べたことに通じている。とはいえ、個人の「外」に注目する社会学では、危険の状況の認識および不安の仕組みについて考察する時には、やや物足りない。

換言すれば、フロイトが述べた「漠然とした危険状況」についてはさらなる社会的な検討が必要である。第一に、精神分析では「(自我においては) 漠然として対象を持たないこと」が重要であるとしても、社会学では「なぜ人々が漠然とした対象に不安を感じるのか」ということについてさらに検討する必要があるということである。たとえば、「人間は自由の刑に処されている」(Sartre [1946] 1996 : 39 訳 29) と述べたジャン＝ポール・サルトル (Jean-Paul Sartre, 1905-1980) によれば、自由な人間は2つ以上の選択肢のなかから1つを選択する際に、その責任感から不安になることを指摘している (Sartre [1946] 1996 : 33-37 訳 22-26)。つまり、近代以降において(善とされる)自由を尊重する価値観が人間における不安の源泉となっているということになる。さらに述べれば、そもそも「責任を負う選択を求められること」は、なぜ危険状況になるのだろうか。つまり、不安に関わる社会的要因およびその仕組みを丁寧に探ることは重要な意味がある。実際、COVID-19によるパンデミックは、ITが高度に発達した現代において正確な情報を得られるか否かという要因が個人の不安に大きな影響力を持っていること(あるいは、安心を得るために人々がどのように情報を活用したのか)を再確認させた。このことは、社会的潮流としての不安あるいは社会不安の探求にも通じている。

第二に、不安を感じる時に個人がおかれている状況、すなわち、集団との関係についても探求する必要がある。危険に対して一人ひとりの個人は無力かもしれない

が、集団で「立ち向かう」こともある。つまり、無力な状況において助けてくれる人の有無あるいは仲間との関係は非常に重要になるということである。たしかに、フロイトにおいても、幼児が母親を認識できない時に不安を感じるということについて言及しているが、本研究で重視していることは、たとえば、危険状況において家族や仲間の存在の有無によって不安の感じ方も変わるのではないかということである。他方、集団との関わりによる負の側面もある。(この点に関しては、心理学とも多くの関心を共有するが) 対人関係における葛藤やストレス等による不安、あるいは、いじめのような場合、自分の存在意義が欠如する等によって不安・恐怖が生じることもある。

いずれにせよ、集団あるいは他者との関係で不安をとらえることは社会学的に意味がある。

#### 4. 内集団／外集団

現代社会における集団をとらえる1つの理論として、とりわけ、不安の増加を説明する際には、デュルケームおよびギユルヴィッチの統合論等を重ね合わせて拡充・修正したサムナーの「内集団・外集団」の理論が有益である。ただし、ここで想定されているものは、パーソンズの AGIL 図式のような壮大な体系的な理論ではなく、むしろ、マートンによって提唱された「中範囲の理論」である。

ところで、「社会」は多様な意味を有しているため、まず、本研究における「社会」の意味を限定する必要があるが、『広辞苑 第7版』における1つめの説明が筆者のイメージする社会集団について絶妙に言いえている。すなわち、「①人間が集まって共同生活を営む際に、人々の関係の総体が1つの輪郭をもって現れる場合の、その集団。(以下略)」(新村 2021: 1349、下線清水)と。実際、「集団」が成り立つためには、意識的・無意識的にひかれた境界線(輪郭)によって囲まれた「人々」が想定されており、かつ、内側に含まれなかった(つまり、排除された)「他者(あるいは他の人々)」が必要である。そして、ある集団に所属する人物が自らを含めて描いた輪郭の内側の人々が「内集団」(in-group)、輪郭の外側に位置づけられた人々が「外集団」(out-groups)になる。

まず、サムナーの説明を確認する。彼によれば、未開社会には、一定の地域に散在する小集団群があり、それらは結合や分化をするなかで、内集団と外集団の分化が生じる。そして、内集団の内部では、平和・秩序の関係があるのに対し、外集団とは、戦争や略奪の関係があるという。また、サムナーにおいては、内集団とわれわれ集団(we-group)は同義として扱われている。やや長いが引用する。「われわれが定式化することができる『未開社会』の概念は、一定の地域にばらまかれた小集団群ということである。集団群の規模は、生存競争の諸条件によって決定される。

各々の集団の内部の組織は、その規模と対応する。集団群のなかの1つの集団は、お互い同士、親族、隣人、同盟、婚姻、取引などで、何らかの関係をもっているかもしれない。そしてそれが、お互いに結合したり、他と分化したりする。このようにして、われわれ自身・われわれ集団・内集団と、他の皆・その他の集団 (the others-groups)・外集団との間で分化が生じる。われわれ集団の内部の者は、お互いに平和、秩序、法、統治、勤勉の関係にある。よそ者 (outsider) やその他の集団との関係は、契約によって状況を修正しない限り、戦争や略奪の関係にある」(Sumner [1906] 1979 : 12 訳20)。

さらに、「われわれ集団あるいは内集団には、仲間関係、平和、法、秩序があり、すべての外集団とは、疑惑、敵意、略奪、そして可能であれば征服という関係であった」(Sumner [1906] 1979 : 496) と述べた上で、内集団における平和と外集団に対する敵意や闘争は相互に関係しているとみなす。すなわち、「外部の者との戦争の危機は内部を平和にする」(Sumner [1906] : 12 訳21) が、外集団が接近していればいるほど、また、外集団が強ければ強いほど、内集団における組織や規律は厳しいものとなる。同時に、内集団に対する忠誠、そのための犠牲、兄弟愛の感情が生まれる一方で、外集団に対する嫌悪や侮蔑の感情も生まれる。そして、これらの関係や感情が宗教と結びつくことで神聖化された1つの社会哲学が構成され、「よそ者を殺すこと、略奪すること、奴隷化することが善行」(Sumner [1906] 1979 : 13 訳21)、すなわち、道徳的に善なる行動になることを指摘した。

そして、内集団とエスノセントリズムの関係について、「われわれ集団があらゆるものの中心であり、他のすべてのことは、それとの関係で計られ、評価される」(Sumner [1906] 1979 : 13 訳21) と考えるサムナーは、「各々の集団は、自分自身の自尊心や自負を抱き、自己を優れたものとして誇り、それ自身の神聖を称揚し、よそものを軽蔑のまなこでもって眺める。おのおのの集団は、自己のフォークウェイズを唯一の正しいものと思い、そして、もし、他の集団が他のフォークウェイズをもっていることに気づいた時には、それはそのさげすみの感情を起こさせる」(Sumner [1906] 1979 : 13 訳21)。「エスノセントリズムは、人々をして、彼らのフォークウェイズにおけるすべてのことを、それは特有のものであり、それが自らを他と異ならしめているのだ、と誇張し、強調する方向へと導く」(Sumner [1906] 1979 : 14 訳22)、と述べる。つまり、自分の有する文化(作法等)と外集団におけるそれとの違いは、さらに内集団と外集団の区別を意識させるように影響し、かつ、自らの文化の優位性の強調に結びつくというのである。

改めてまとめれば、サムナーによれば、外集団との近接性および外集団の強さが内集団における統合を高め、また、エスノセントリズムを伴うと、自分たちを優れていると考える一方で、外集団に対する嫌悪や侮蔑の感情が生じるというのである。また、「内集団・外集団」というまなざしは、内集団には、兄弟愛、忠誠とそ



れに伴う犠牲、自慢、自尊心、自負、最上・高貴な存在（神聖性）、善の感情を、他方、外集団に対しては、嫌悪、侮蔑、疑いと敵意の態度の遵守、悪、さらに征服したいという感情を生じさせるというのである。

サムナーの内集団・外集団について2点補足が必要である。第一に、彼の「内集団／外集団」の概念は、「未開社会」の分析によるものであるが、国家や愛国心についても言及している。すなわち、彼は未開社会だけではなく、近代における親族集団から国家に至るまでのさまざまな社会集団への適用も想定していたということである。実際、内集団・外集団の概念を現代社会における中小グループだけでなく、現代の国際社会およびグローバル社会にも適用することは有益である<sup>10)</sup>。

第二に、「生存競争の諸条件」等の表現に、サムナーの社会ダーウィン主義の特徴が強く見られるということである。青柳清孝は、サムナーの問題点として「生存や生活からの発想が、あまりにも生物学的なものに偏り、そしてそれがさらには社会的ダーウィン主義的立場などと結びついて、人間の生まれつきの差異の強調や、適者生存的発想や、さらに大衆蔑視的論調などにつながっている」（青柳 2005：351）ことを指摘している。言うまでもなく、現代において「適者生存」という社会ダーウィン主義は決して許されない考え方である。しかしながら、近年のネオリベラリズムによる格差拡大、あるいは、エスノセントリズムと結びついたナショナリズムによる21世紀の国際情勢などを考える際には、皮肉にも、「内集団は、軽蔑と嫌悪をもって外集団の風習を眺める」（Sumner [1906] 1979：116 訳147、傍点清水）という彼の内集団／外集団の概念が現代社会を分析する上で有益になるのである。

境界線についても検討が必要である。サムナーは、内集団とわれわれ集団を同義として扱う一方で、内集団・われわれ集団の例として、血族による報復（blood revenge）の義務を負う人々の親族集団、あるいは、国家を挙げており、内集団という領域が先に設定されている心象を受ける。しかしながら、現代社会を考える際には、「われわれ」という主観に基づくこと、すなわち、内集団に所属している個人における主観的観点から（外集団との間に）境界線が心理的に引かれるということをやより重視することが有益である。

内集団／外集団という境界線における主観的側面に注目した際に、5点重要なことがある。①この輪郭は視覚的に確認することができないこと。②主観に基づくので、親友の範囲が人それぞれであるように、家族や親族であっても、内集団に入るか否かは本人に委ねられていること。また、同様の理由から当事者双方だけでなく、第三者による認識と一致するとは限らないこと。③内集団を取り囲み、外集団と区別するこの輪郭は、確定的なものとは限らず、流動的なものであること<sup>11)</sup>。④主観的判断から「外集団」に対して「私たちとは異なる」という「まなざし」をお互いに投げかけ合うこと。さらに（サムナー自身も認めていたことであるが）⑤諸個人においては、複数の内集団に同時に所属可能となっていること（Sumner [1906]

1979 : 39 訳 54) である。

また、個人の主観にもとづくという点から述べれば、自生的内集団における外集団への原初的な認識は、フロイトが述べた成長の初期段階における判断機能に通じるといえる。すなわち、ある事物を「私は自分の中に取り込みたいのか、あるいは自分の中から閉め出したいのか（中略）。私の内部にあるべきか、あるいは外部にあるべきか（中略）。本来の快自我は、（中略）良いものは全て取り込み、悪いものは全て投げ出そうとする。悪いもの、自我の知らないもの、外にあるものは、自我にとっては差し当たり同じものなのである」（Freud [1925] 1972 : 13 訳 5）、と。また、同時期の別の論文では、『外部』と『未知』（fremd）、『敵』[という3つの概念]は、かつては同一の概念」（Freud [1926b] 1972 : 223 訳 121）であったとも述べている。

実際、私たちは日常においては「快・不快」の原理に従い、内集団／外集団の境界線を引いていることも多い。その結果、フロイトに従えば、外側に位置づけられた人（人々）に対しては、単に「外にある」というだけでなく、「（外における）存在」を「よく知らないもの」、「悪いもの」あるいは「敵」として漠然と結びつけてしまう。つまり、外に位置づけられた人々をよく知ろうともせず、それゆえによくわからないので恐れる。そして、恐れる対象となった外集団をしばしば敵とみなし、さらに善悪の観念と結び付け、外集団を悪の存在と同一視した時には、その存在を葬ることに躊躇がなくなる。

他方、当然のことながら、この境界線は個人の判断によらない場合もあることに注意しなければならない。つまり、この境界線は自然発生的なものだけとは限らず、一方から他方への押し付け、あるいは、第三者が描いている場合もある。この点に関してギュルヴィッチは、集団を区分する基準の1つとして「集団形成の根拠」、すなわち、(a) 事実上の帰属にもとづく集団、(b) 自発的意思による帰属にもとづく集団、(c) 強制的帰属にもとづく集団という3つを挙げている。すなわち、「われわれ集団」の形成には3つのパターンがあるということになる。(a) 事実上の帰属にもとづく集団とは、社会階級、民族的なマイノリティ・グループ、年齢集団などのように、「当の集団のメンバーが明示的に参加を望むまでもなく、あるいは、一定の組織の命令への服従を待たなくとも参加していることになるような集団である」（Gurvitch 1957 : 319 訳 238）。また、(b) 自発的意思による帰属にもとづく集団とは、会社などのように、「メンバーが完全な〔自由〕意思で参加する集団、すなわち、メンバーの同意、あるいは、メンバー自身の特有の欲求によって参加が許容されるに至った集団である」（Gurvitch 1957 : 320 訳 239）。この集団の特徴の1つは、脱退が加入よりも難しいということにある。そして、(c) 強制的帰属にもとづく集団とは、国家、市区町村の自治体、あるいは学校のように、「メンバーに参加を強制する、あるいは受益者メンバーに服従するよう拘束する集団」（Gurvitch 1957 : 321 訳

240) である。なお、ギュルヴィッチにおいては、これら3つの集団は排他的に位置づけられておらず、たとえば、現代の家族は、自発的—事実的—強制的という三種の集団の側面を有していることを指摘している<sup>12)</sup>。

さらに別の観点からも眺めておくことは意味があると考ええる。内と外を区別する基準は、家族、親族、地域、学校におけるクラス編成など、日常的に人々が空間的に認識している集団をもとに採用されていることが多い。そして、それらのそれぞれの空間内において、行為者間における「同じ／違う」によってさらに細分化も生じる。その際には、外見上の身体的・行動的相違、文化の違い（たとえば、服装や趣味等も含む）、あるいは、過去に私たちと同じ／違う行動・考えを示した等の客観的・具体的な事実に基づくこともある。なお、付言すれば、国家は、特殊である。なぜなら、「国境線」という地理的に明確な境界線を持ち、また国益を重視する経済的システムが存在するからである。そして、文化などの「差異」をもとにして他国と相対的に位置づけられていることが多いが、そうでない場合もある。

## 5. 内集団における「統合」と不安

ギュルヴィッチの「われわれ集団」論は、サムナーの「内集団・外集団」論と異なる点が多い。とりわけ、4つの相違点が挙げられる。「『われわれ』こそ、他人関係の範囲を規定し、境界づけをする役割を果たし、これらなくしては他人関係は設定されない」(Gurvitch 1957: 136 訳148) と考えるギュルヴィッチは、サムナー同様、社会を「多様な形でたがいに競い合い、均衡し合う諸集団が錯綜してつくる多元性の増大」(Gurvitch 1957: 4 訳6) している状態ととらえた。そして、全体社会あるいは「われわれ集団」のなかに複数の「われわれ集団」が存在し、また、一人の人間が複数の「われわれ集団」に同時に所属することを指摘している。とはいえ、ギュルヴィッチにおいては、「われわれ集団」の外に位置するのは「外集団」ではなく、「他のわれわれ集団」と考えたことが第一の相違点として挙げられる。自由かつ平等な社会を実現するためには、われわれ以外の人たちにも、尊重すべき諸個人が存在することを意識する必要がある。その意味では、ギュルヴィッチの「他のわれわれ集団」という理論のほうが優れている。しかしながら、現代社会を把握するためには、皮肉にも、他者集団を「外(敵)」とみなすサムナーの「内集団・外集団」論が現実に沿っている理論となってしまうのである。

第二の相違点は、内集団においてサムナーが平和、仲間関係を見出したのに対し、ギュルヴィッチは、内集団にも対立、葛藤、競合、あるいは抗争等があることを指摘したことである。ただし、「われわれが関係するこの他者とは、個人、『われわれ』、現実の集合的単位（いわゆる集団あるいは時には全体社会）、いずれの場合もありうる」(Gurvitch 1957: 143 訳154-155) と述べているように、「他者関係」とは、

(内集団における) わたくしと他者との関係だけでなく、当然のことながら、(第一の相違点で述べた)「他のわれわれ集団」(あるいはそこに所属する諸個人)との関係も含んでいる。彼は「個々の集団の内部にはいくつかの『われわれ関係』、いくつかの他人関係が互いに対立関係に入ることがある」(Gurvitch 1957: 120 訳129)と述べている。

第三の相違点は、わたくし [le moi]、他者 [l'autrui]、われわれ [le Nous] という心理現象における「視界の相互性」にもとづく「関わり合い」にギュルヴィッチが注目したことである (Gurvitch 1957: 4 訳6)。彼は、頻繁に社会交渉を行うことで、「われわれ」への部分的融合〔「私」の中に他の「私」を取り込む(あるいは、侵入される)こと〕、すなわち、「相互内在性」が生じると考えた。なお、この考えは「成員相互の交渉が活発で、絶え間なく行われれば行われるほど、集合体は一層よく統一され、堅固なものとなる」(Durkheim [1897] 1997: 214 訳239)と考えたデュルケームの「集団への愛着」をもとにした連帯を拡充した理論といえる。

さらに、ギュルヴィッチは、デュルケームの「社会統合の強さ」を相互内在性の程度(「われわれ」と感じる強さ)と解釈した上で、大衆 (masse)、コミュニティ (communauté)、コミュニオン (communion)<sup>13)</sup> という3つの段階が存在すること (Gurvitch 1957: 128 訳140、他)を指摘していることが第四の相違点として挙げられる。なお、この3つのわれわれ集団の特性をとらえる際に、(a) 諸個人への圧力 (la pression)、(b) 部分的融合の量 (volume)、(c) われわれ集団に惹き付ける力 (La force de l'attraction)<sup>14)</sup> との関係を彼は指摘している。

大衆とは、われわれへの融合の強さと深さがもっとも最低で、自我と他者がそれぞれ表面的に相互浸透を行う集団である。惹き付ける力がもっとも弱いので、諸個人への圧力はもっとも高くなる。ただし、ギュルヴィッチは一般的な用法から距離をとっており、消極的あるいは積極的価値のどちらも認めていない。また、コミュニティは、メンバーの融合、作用する圧力、そして惹き付ける力が「平均的中位にあるレベル」の集団と位置づけられている (Gurvitch 1957: 158 訳170)。そして、コミュニオンとは、「『われわれ』のうちへの融合の深さや惹き付ける力、そして参加の度合いが最高の強さにあることを表し、そのメンバーは、こうした事実を圧力と感ずることがもっとも少ない」状態の集団を指す (Gurvitch 1957: 165 訳177)。なお、ギュルヴィッチは、コミュニオンについて「自我・他者・『われわれ』の三者がこれ以上はないと思われるまでに相互に内在しあっている」(Gurvitch 1957: 165 訳177)とも説明している<sup>15)</sup>。

ところで、「内集団／外集団」と不安はどのように関わるのだろうか？ 実は、サムナーもギュルヴィッチも、「不安」について言及していない。ただし、先の「外=未知=敵」というフロイトとの関わりから、敵である未知の外集団の存在そのものが恐怖あるいは不安を生じさせると述べることはできるが、不十分である。



そして、本研究においてデュルケームの統合論で補完する理由はまさにここにある。

デュルケームは、以下のように述べている。「信仰をかたく奉じている信者や、家族社会や政治社会の諸関係に強く結ばれている者は(中略)自分の存在とその行為を、それぞれの教会やその生きた象徴である神に、あるいは自分の家族に、その祖国または党派に結びつけている」(Durkheim [1897] 1997: 227 訳253)。しかし、属している集団への連帯感が弱まると、「彼らは自分自身がよくわからなくなり、苛立ち、苦悶し、自問せざるをえなくなる、『一体、何のために……』と」(Durkheim [1897] 1997: 227-228 訳253)。つまり、強い「われわれ意識」は、諸個人に自らの役割だけでなく、生きる意味や自分の存在意義を生じさせるのである。

さらに、「自分以外に志向すべき対象をもたない時には、われわれの努力も結局は無にってしまうに違いない、という観念から逃れられなくなる。(中略)この無への消滅は恐怖を抱かせる。こうした状態のもとでは、(中略)生きる勇氣、すなわち、行動し、戦う勇氣をくじかれてしまう。(中略)自己本位的状況は、(中略)あまりに不安定で、それだけで持続することはできない」(Durkheim [1897] 1997: 224-225 訳250、下線清水)と述べている。また、「社会という対象がわれわれの精神的構造のなかに含まれていて、それが一部でも崩壊すると」、動揺状態を生じさせるとも述べている(Durkheim [1897] 1997: 228 訳254-255)。つまり、「われわれ意識」を感じさせる内集団への所属および仲間がいるとの感覚は、個人に安定をもたらすのである。

なお、デュルケームもまた、敵意が「緊密に連帯して生きることを強いる」(Durkheim [1897] 1997: 160 訳183)ことを指摘しているが、彼の統合論と主観的に境界線が引かれるという点に注目すれば、外集団を設定し、強調することで安心を得るという方策もありうることになる。すなわち、ある人々を意図的に「外」に位置づけることで「われわれ」を位置づけし、その内部に自分がある、一人ではないと感じることで安心が得られるということである。COVID-19によるパンデミックやいじめにおける攻撃性がその例として挙げられる。

さらに、アノミーの傾向を持った自己本位主義者についてデュルケームは以下のように述べている。「絶えず満たされない欲望を抱いている者でも、一定の限界につきあたれば、その慰めを求めるようにさせることがある。しかし、[もともと]彼は内面生活のなかに愛着の対象となりうるものを見出すことができないので、その心象の促す悲哀は、再び、彼を逃避に迫りやり、結局、不安 (inquiétude) と不満を募らせる」(Durkheim [1897] 1997: 325 訳362、下線清水)。また、自己本位主義と集団本位主義の両面を伴った際の説明では、「束の間の享樂は、たとえ絶えず目新しさをもたらし続けるものであっても、どのみち彼らの不安 (inquiétude) を静めることができない」(Durkheim [1897] 1997: 326 訳363、下線清水)、と述べている。つ



まり、愛着のある集団を持っていない個人は、自分の欲求充足を求めるだけでは安心を得られないというのである。実は、フロイトも過大で実現できない欲求の前に不安を発展させることを指摘している。すなわち、「過大となった欲求の緊張を前に自我の無力な状態がつくられ、(中略)不安の発展という結果を招く」(Freud [1926a] 1972: 172 訳 69)、と。

結局、内集団における統合の弱体化および(その結果としての)アノミー状態は、「不安」や「恐怖」を生じさせるということになる。

## 6. 結びにかえて

本稿では、まず、フロイトの論文「制止、症状、不安」を手がかりに「不安」について明らかにした。そして、サムナーの「内集団／外集団」論を、一方では、フロイトの成長の初期段階における「外」への認識をふまえつつ、他方では、ギュルヴィッチの「われわれ意識」およびデュルケームの統合論によって拡充することで、心理現象としての「不安」を社会的に研究するための中範囲の理論を確立した。実際、心理現象としての「不安」は、単に個人における耐性に限らず、社会的環境による影響も検討する必要があること、とりわけ、本稿では、(外集団とのかかわり方によっても大きな影響を受ける)「内集団における統合」が関わることが明らかになった。

とはいえ、デュルケームによれば、自己本位主義およびアノミーは、個人および自由の尊重という理想につながっているので、内集団における連帯の弛緩は避けられないという。それゆえに、個人の自由および経済的利益が過剰に尊重される時代において「われわれ集団」の役割は大きいと言える。とはいえ、デュルケームは、外集団による危機が切迫している場合等を別として、国家にその機能を果たすことは困難であるとして、個人と国家の間における「中間集団」の重要性を強調した(Durkheim [1897] 1997)。そして、このことは、不安の増大した原因の1つに国家の機能変化を指摘しているバウマンにも関わる。それゆえに、バウマンの理論と比較しつつ、「内集団／外集団」論の視点から、国家および中間集団の役割について再考する必要がある。

他方、デュルケームにおける愛着のある集団の欠如あるいはその弱体化した状態と、ギュルヴィッチの「コミュニオン」との関係について、あるいは、われわれ意識の融合度がもっとも低い「大衆」における不安については、更なる検討が必要である。さらに述べれば、そもそもデュルケームにおける「集団への愛着」を「われわれ意識」という点だけで解釈することの是非についても考えなければならない。

今後、これらの課題を明らかにすることを明記し、結びとする。

注

- 1) Bauman 2001 : 1-3 訳 8-10。なお、本稿において訳文を引用する際には、筆者によって一部改訳されている場合があることを付言しておく。
- 2) 彼は「なぜ不安反応が全て神経症的ではないのか、また、なぜ私たちは、かくも多くの不安反応を正常とみなすのか、という問いが生じる。最後に、現実不安と神経症的不安との区別を根本から考えることが求められている」(Freud [1926a] 1972 : 198 訳 93) と述べている。
- 3) フロイトは、欲動要求が少しでも現実的なものであれば、神経症的不安もまた現実と根差していることを認めている。
- 4) 『小学館ロベール仏和大辞典』では、anxiété' を「(締め付けられるような) 不安、心配」と説明している (小学館ロベール仏和大辞典編集委員会 2000 : 116)。
- 5) *Le Petit Robert* によれば、以下のようにそれぞれ説明されている (筆者訳)。  
'appréhension' : 1. 心をとらえること (Robert Paul 2021 : 121)、'inquiétude' :  
① 1. 平穏 (quiétude)、安らぎ (repos)、安寧 (tranquillité) の欠如。2. [古、文学、哲学] (欲求が) 満たされず苦しんでいる心の不安定で、動揺した状態。(以下略)  
(Robert Paul 2021 : 1338)、'angoisse' : 1. 差し迫った危険の感情から生まれる精神的・肉体的不調で、心配になることからパニックになるまでの漠然とした恐怖、そして上腹部の絞窄や喉頭部の痛みを伴う感覚によって特徴づけられる。(2 および 3 は略)  
(Robert Paul 2021 : 96)、と。
- 6) さらに、フランス語には、個人や集団における漠然とした不安を示す 'malaise' もある。
- 7) 『小学館ランダムハウス英和大辞典』では、'fear' の意味として、「1. (差し迫った、またはそう思われる危険・苦痛・災いなどに対する) 恐怖、恐れ」という意味の他に「3. 心配、懸念、気遣い、不安、猶予」という意味があることが確認できる (小学館ランダムハウス英和大辞典編集委員会 1990 : 921)。
- 8) さらに澤井は 'fear' を原則「不安」、文脈によっては「恐れ」、'horror' を原則「恐怖」、'terror' を原則「脅威」あるいは「恐怖」、'anxiety' を原則「不安感」、文脈によっては「不安」と訳したと述べている (バウマン 2012 : 269)。
- 9) とはいえ、実は、個人の心理現象である「不安」と社会との関係に注目した社会学者は少なくない。そして、不安について言及している社会学理論において、不安を生じさせる外部的要因から社会学理論の分類・整理が可能と考えている。そこで、「不安」とのかかわりで社会学理論を整理することも、本研究の目的の1つである。
- 10) 現在、国際社会とグローバル社会を同義と考える傾向があるが、筆者はあえて区別することを重視している。すなわち、国と国の関係をとらえるのか、国家という枠組みにとらわれない1つの地球をとらえるのかという違いである。たとえば、2020年に発生した COVID-19 によるパンデミックは、国際社会による抑制とグローバル社会を背景に

した拡大という「現代世界」における二面性を示した。

- 11) 当初、外集団と位置づけられ、対立していた場合でも、有事の際には協力してより大きな内集団を形成することもある。
- 12) 夫婦は合意にもとづくので自発的集団であるが、子どもは出生の当初から家族の一部であり、かつ、強制的帰属による集団でもある。
- 13) フランス語の‘communion’は、聖体拝礼あるいは(思想・感情などの)一体感や結びつきを意味する。前二者(大衆、コミュニティ)にならった社会集団としての訳語としては「信者の共同体」という意味もある。しかしながら、ギュルヴィッチにおいては、信仰集団だけではなく、同じ信条を持ち、考えや感情などが一致している集団全般を指している。翻訳書では、「一体化」と訳されているが、集団の意味合いが欠如してしまうため、本稿では「コミュニオン」と表記している。
- 14) 翻訳書では、「牽引力」と訳されているが、本稿では、デュルケームの統合論を意識して「惹き付ける力」と訳している。
- 15) ギュルヴィッチは大衆、コミュニティ、コミュニオンという3つの段階に優劣をつけていないことは重要である。

## 主要参考文献

- 青柳清孝 (2005) 「解説」サムナー、青柳清孝他訳、『復刻版フォークウェイズ』青木書店、pp.347-375。
- 奥井智之 (2014) 『恐怖と不安の社会学 現代社会学ライブラリー16』弘文堂。
- 加藤敏 (2010) 「解題」フロイト『フロイト全集19』岩波書店、pp.355-384。
- 岸見一郎 (2021) 『不安の哲学』祥伝社新書。
- 澤井敦 (2012) 「訳者あとがき」バウマン、澤井敦訳、『液状不安』青弓社、pp.263-270。
- 清水強志 (2007) 『デュルケームの認識論』恒星社厚生閣。
- 清水強志 (2016) 「グローバル社会とエスニシティ」篠原清夫他編『大学生のための社会学入門』晃洋書房、pp.150-162。
- 清水強志 (2017) 「グローバル時代におけるデュルケーム社会学」『社会学論叢』第188号、日本大学社会学会、pp.1-21。
- 清水強志 (2020) 「デュルケーム—実証的科学としての社会学の確立—」松野弘監修『社会学史入門』ミネルヴァ書房、pp.75-90。
- 小学館ランダムハウス英和大辞典編集委員会 (1990) 『小学館ランダムハウス英和大辞典』小学館。
- 小学館ロベール仏和大辞典編集委員会 (2000) 『小学館ロベール仏和大辞典』小学館。
- 新村出編 (2021) 『広辞苑 第7版』岩波書店。
- 中久郎 (1979) 『デュルケームの社会理論』創文社。
- Bauman Z. (2000) *Liquid Modernity*, Polity Press. (バウマン、森田典正訳 (2001) 『リキ

- ッド・モダニティ』大月書店)。
- Bauman Z. (2001) *Community*, Polity Press. (バウマン、奥井智之訳 (2017) 『コミュニティ』筑摩書房)。
- Bauman Z. (2006) *Liquid Fear*, Polity Press. (バウマン、澤井敦訳 (2012) 『液状不安』青弓社)。
- Bauman Z. (2017) *Retrotopia*, Polity Press. (バウマン、伊藤茂訳 (2018) 『退行の時代を生きる』青土社)。
- Durkheim É. ([1897] 1997) *Le Suicide*, Presses Universitaires de France. (デュルケーム、宮島喬訳 (1985) 『自殺論』中公文庫)。
- Freud S. ([1925] 1972) “Die Verneinung”, *Gesammelte Werke XIV werke aus den Jahren 1925-1931*, Frankfurt am Main = S. Fischer Verlag, pp.9-15. (フロイト、加藤敏・石田雄一・大宮勘一郎訳、(2010) 「否定」『フロイト全集19』岩波書店、pp.3-7)。
- Freud S. ([1926a] 1972) “Hemmung, Symptom, und Angst” *Gesammelte Werke XIV werke aus den Jahren 1925-1931*, Frankfurt am Main = S. Fischer Verlag, pp.111-205. (フロイト、加藤敏・石田雄一・大宮勘一郎訳、(2010) 「制止、症状、不安」『フロイト全集19』岩波書店、pp.9-101)。
- Freud S. ([1926b] 1972) “Die Frage der Laienanalyse” *Gesammelte Werke XIV werke aus den Jahren 1925-1931*, Frankfurt am Main = S. Fischer Verlag, pp.207-295. (フロイト、加藤敏・石田雄一・大宮勘一郎訳、(2010) 「素人分析の問題」『フロイト全集19』岩波書店、pp.103-199)。
- Gurvitch G. (1957) *La Vocation actuelle de la sociologie I*, Presses Universitaires de France. (ギュルヴィッチ、寿里茂訳 (1977) 『社会学の現代的課題』青木書店)。
- Martha C. Nussbaum ([2004] 2006) *Hiding from Humanity: Disgust, Shame, and the the Law*, Princeton University Press. (マーサ・ヌスバウム、河野哲也監訳 (2010) 『感情と法—現代アメリカ社会の政治的リベラリズム—』慶應義塾大学出版会)。
- Robert Paul, Alain Rey, Josette Rey-Debove (2021) *Le Petit Robert de la Langue Francaise Dictionnaire 2022*, Le Robert.
- Sartre J.-P. ([1946] 1996) *L'Existentialisme est un humanism*, Gallimard. (サルトル、伊吹武彦訳 (1972) 『実存主義とは何か』人文書院)。
- Sumner W. G. ([1906] 1979) *Folkways*, New York = Arno Press. (サムナー、青柳清孝他訳 (2005) 『復刻版 フォークウェイズ』青木書店)。